

# 液肥施用条件がスプレーギクの日持ちに及ぼす影響

## 1. 試験のねらい

養液土耕法によるスプレーギクの栽培において、液肥濃度および施肥時期を変えた条件で栽培した場合の日持ち性を調査し、適正な液肥条件を決定する上での参考とする。

## 2. 試験方法

切り花長 65cm、生体重は 40～45g 程度で、開花ステージは頂花が完全に咲き、側花 2～3 輪の花弁が 45 度程度に開いた状態の切り花を収穫し、室温 20℃設定、300lux 蛍光灯 24 時間照射の条件下の場内鮮度保持室で実施した。なお、容器（容量 1000ml、材質：益子焼き）に水道水 300ml を入れて、1 日毎に切り戻し処理を行い、同時に水を交換した。開始後 3 週目から 1 週おきに花の萎凋率および黄化葉率を調査した。

試験の構成は次のとおり。

試験Ⅰ－5 月定植 7 月出しの作型のサンプルを供試。平成 7 年 7 月 21 日開始。

試験Ⅱ－8 月定植 10 月出しの作型のサンプルを供試。10 月 21 日開始。処理は、Ⅰと同様。

試験区は試験Ⅰ・Ⅱ共通で、養水分管理プログラムおよび液肥窒素施肥量は表－1 のとおり。

## 3. 結果および概要

- (1) 試験Ⅰ：黄化葉率は 1 および 4 区のサンプルが低く推移した。2 区のサンプルは、4 週以降の黄化が著しかった。花の萎凋率は 1 および 3 区で低かった（表－2）。結果として、発蕾から開花まで継続して施肥を行った 2 区では黄化葉率および花の萎凋率、4 区では花の萎凋率が高い傾向であった。
- (2) 試験Ⅱ：黄化葉率は、1 区のサンプルがやや低かった。花の萎凋率は、1 および 2 区のサンプルが同程度で、3 区のサンプルがやや高かった（表－3）。
- (3) 以上の結果からスプレーギクの日持ち性は、液肥施用を少なく抑え、生育後期以降の液肥施用を控える管理を行ったプログラム 2 が最も良好であった。

## 4. 成果の要約

スプレーギクの日持ち性を考慮した場合、1 作の液肥窒素施肥量は 2.0kg/10a 程度、施用は発蕾期の 1 週間後を目安に控える管理が適正であった。

（担当者 花き部 鈴木智久）

表-1 養水分管理プログラム（1日当たり液肥施用量は窒素、リン酸、カリ共通）

区No.	定植後0週	1週	2週	3週	4週	5週	6週	7週	8週	9週	10週	施肥量合計
生育ステージ	目安	消灯			発蕾			花卉着色			開花	
1	0mg/m <sup>2</sup>	13	50	75	75	75	0	0	0	0	0	2.0kg/10a
2	0	13	50	75	75	75	75	75	0	0	0	3.0
3	0	13	100	150	150	150	0	0	0	0	0	4.0
4	0	13	100	150	150	150	150	150	0	0	0	6.0
全区かん水量(1/m <sup>2</sup> )		4.0	0.5	1.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	1.5	1.0	

表-2 試験Ⅰの黄化葉率および花の萎凋率

区No.	黄化葉率(%)			花の萎凋率(%)		
	3週	4週	5週	3週	4週	5週
1	9	23	34	0	0	19
2	27	79	81	3	18	50
3	7	38	48	0	0	24
4	14	27	32	0	8	27

表-3 試験Ⅱの黄化葉率および花の萎凋率

区No.	黄化葉率(%)		花の萎凋率(%)	
	3週	4週	3週	4週
1	27	43	20	28
2	30	53	19	28
3	37	48	25	34